

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26285038

研究課題名(和文) 中国における主権認識の変容と外交 - 言説と交渉 -

研究課題名(英文) The Historical Transition of Concept of Sovereignty and its Influence on Diplomacy: Discourse and Negotiation

研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA, Shin)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：90301861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国の対外政策の面での主権概念の形成について、理念、言説、交渉の三面からの解明を迫ること、またそれを清末から民国を経て中華人民共和国期という20世紀を通じて分析することを目指した。本研究では以下のことが明らかになった。第一に、20世紀初頭のビルマ国境交渉などで、清朝は歴史的な背景を根拠に主権を主張するスタイルを生み出していた。第二に、それはアメリカ留学の外交官などにより民国期にいっそう理論武装され、中国の存在を維持していく根拠となった。第三に、中華人民共和国期にも平和五原則などでその姿勢は維持されたが、次第に中国が国力の増強とともに実効支配空間を拡大する根拠へと展開していった。

研究成果の概要(英文)：This project designed to make it clear how did Chinese concept of sovereignty form historically. We approach the target from the several perspectives; historical thought, narrative and negotiation, and have the historical bird's-eye view, from late Qing, Min-kuo to PRC period. Through this project, we have a temporal image of this topic. Firstly, in late-Qing, the officials had held the styles to express its sovereignty based on its historical background, like the case of the negotiation of border problem with British Burma. Secondly, in Min-kuo period, many young China came back mainly from USA, who learned the modern international law, and reinforced and completed the concept of sovereignty to hold "China" as a nation-state in the world. Its independence and territorial maintenance were the main purpose of their diplomacy. Thirdly new communist official basically continued to keep the concept of sovereignty, but they added some flavor of communism and the image of Asia-Africa.

研究分野：中国・台湾の政治外交史、国際関係史

キーワード：主権認識 中国外交 外交史と外交研究 領土と国益 内政不干渉原則 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

中国外交史研究、現代中国外交研究はこの10数年、中国外交文書の公開や現代中国への関心の高さから、大いに進展してきた。ここでは、従来の革命外交を中心とした外交史像が是正され、また従来の指導者の発言などを重視した研究から、理論に基づいた、客観的な現代中国外交分析がなされるようになった。だが、そこには中国外交史分析と現代外交研究の乖離という問題が見られた。その断絶の克服を目的とした研究、また中国外交の150年に通底する課題として、いわゆる「冊封」「朝貢」の実際の状況と近代以後の記憶化に着目した研究、さらに中国外交を長期的に俯瞰する研究をこれまで実施してきた。その過程で、やはり長期に亘り中国外交の核心として頻りに説明や根拠に用いられながら、実態が曖昧模糊としているのが「主権」だと考えるに至った。実際、この問題には台湾の唐啓華らの先行研究がある。だが、これらの研究も、「主権」はアプリアリに設定された中国外交の説明要素であり、その中国の「主権」認識の変容や、外交交渉での立ち現れ方については十分に解明されていない。

また、本研究メンバーはそれぞれこの課題に取り組んできた。研究代表者の川島は、中国の記憶にある中国の伝統的な空間認識が近代以降にいかに関与したかを指摘し、また国内の主権認識と近代中国の境界に注目するとともに、領土認識や国権認識の研究を継続してきた（『領域と記憶』『模索する近代日中関係』東京大学出版会、2009年、「未完の『近代』外交』『現代中国』85号、2011年など）。領土や境界、また国権回収問題などにおける諸問題を「主権」に焦点をあてて明確に指摘したのは、研究分担者の岡本隆司であった。岡本は、『主権』の形成—20世紀初頭の中国とチベット・モンゴル（『比較地域大国論集』7号、2012年）において、20世紀初頭の国境画定交渉に際して用いた「主権」のあり方が、認識面、交渉面で以後の中国外交を規定したのではないかと問題提起をおこなった。しかし、目下のところ長期的な検証はなされていない。他方、研究分担者の茂木は思想史の観点から、19世紀中国の国土認識、領土認識から出発し、それらが万国公法にいかに関与したのかを明らかにしてきた（『中国王朝国家の秩序とその近代』『理想』682号、2009年など）。現代中国外交研究者で、研究分担者の青山は、一貫して領土問題、海洋主権問題を検討し、現代中国外交の領土や主権に対する関わりを、複雑で多様な外交態様を描き出すことに成功している（『領土問題と中国の外交』『中国年鑑 2011』中国研究所、2011年など）。このように、本研究メンバーはそれぞれ「主権」や関連する諸問題を個別に研究してきた。こうした経緯を踏まえ、また岡本の『主権』の形成」という問題提起を着想の契機として、本研究は組織された。これらについては、唐啓華をはじめ海外の研

究者とも意見交換をしたが、いずれもその重要性を共有してくれている。

2. 研究の目的

本研究は、中国外交（史）研究でつとにその重要性が指摘される「主権」について、根底から再検討する。この課題が必要なのは、近代から現在にいたる中国外交において、領土、領海、国民、国権回収、不平等条約改正、内政不干渉原則など、「主権」にまつわる事柄が外交の焦点になり、中国政府も「主権」を強調した外交をしてきたのに、その「主権」がいかに関与され、いかに交渉の現場で主張されたのか、という根源的な問題が、十分に解明されていないからである。そこで本研究では、国内の中国外交史、現代中国外交研究者がチームをつくり、国外の研究者とも連携しながら、この問題に取り組む。この課題が解明されることで、中国外交の変容と一貫性を長期的な視野でより明確に把握できる。

3. 研究の方法

(1) 本研究は19世紀から現在までの中国における「主権」について、言説に現れる認識と外交交渉の現場における状況に分けて検討する。岡本『主権』の形成、川島「近代中国における国境の記憶」（『境界研究』1号、2010年）などにおける「主権」に関する問題提起を、実証的に解明する。研究体制および役割分担は別表の通りである。言説につ

時期	作業内容		分担
清末	言説	伝統中国における空間認識、万国公法における主権認識などを検討。	茂木
	交渉	19世紀の領土交渉から、20世紀初頭の「主権」の形成の事例研究を実施。	岡本
民国	言説	民国期の「外交」をめぐるテキストにおける「主権」認識の検討。	茂木 川島
	交渉	外交文書の「主権」、交渉「主権」の意味を事例研究で検討。	川島 岡本
人民中国1	言説	毛沢東、周恩来らの指導者の言説を中心に、『人民日報』などの主要紙を分析対象とする。	青山 川島
	交渉	「主権」をめぐる中ソ対立、チベット問題の経緯を辿る。台湾問題などから「主権」の事例研究。	青山
人民中国2	言説	改革開放以後の外交当局、『人民日報』などの主権認識を検討。	青山 川島
	交渉	1990年代以後の国境交渉を中心に「主権」の扱いについて事例研究。	青山

いては主要史料をトレースし、交渉については事例研究を重ねることとし、交渉部分は初年度から事例研究を重ね、最終年度に言説部分の補遺、また交渉過程の事例研究を集中的におこなう。

初年度、第二年度は、「言説」について主に国内で史料収集を行い、戦前戦後の中国研究における「主権」認識についても再検討し、「交渉」については、国内外において文書収集作業を行い、中国自身の文書と交渉相手の双方から、可能な限りマルチアーカイブ方式にて事例研究を実施する。あわせて、非公式な科研メンバーの研究会とは別に、内外からスピーカーやディスカッサントを招聘して研究会を開催する。第三年度にはそれまでの研究成果をもとに議論を深め、シンポジウムの開催などにより総括をおこなうことを当初の研究手法と想定した。実際には以下のように進めた。

(2) 初年度は、研究組織を立ち上げ、本研究課題の意識共有をはかるとともに、史料収集を中心に、分担者がそれぞれの課題に取り組んだ。また、本科研の研究会である東アジア国際関係史研究会を3回開催した。

(3) 第二年度は「言説」について、「主権」認識の変容過程を明らかにし、領土・領海、国権、国籍などといった関連内容についての認識も絡めながら、変化のポイントや連続性について概要を把握した。「交渉」部分は引き続き資料収集と分析を行い、3年間で的事例研究の重複を避けるべく、異なる角度から検討することを意識した。新たな視点を取り入れるべく、積極的に外部の研究者を招聘し、東アジア国際関係史研究会を5回開催した。

(4) 最終年度には、「言説」「交渉」については各時代の比較検討をおこない、これまでのそれぞれの研究成果から議論の集約をおこなった。東アジア国際関係史研究会は7回開催し、そのうち1回は本科研メンバーすべてが報告を行い、科研終了後の論文集出版に向けて情報共有をはかった。

4. 研究成果

(1) 初年度は、中国の主権にまつわる「言説」や「交渉」に関する史料の閲覧、収集について、代表者の川島中心に、国内では東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、外務省外交史料館、国外では、台湾の中央研究院近代研究所、国史館、国家図書館、中国の上海市档案馆、第二歴史檔案館、湖南大学、その他韓国やアメリカなどでおこなった。また、岡本隆司が『宋主権の世界史—東西アジアの近代と翻訳概念』など中国における「領土」概念や主権をめぐる「言説」の枠組みを提示し、茂木敏夫は「中華世界秩序論の新段階」や「近代以降の東アジアにおける地域秩序の変容と中国」で19世紀後半から20世紀前半にかけての「交渉」について詳らかにし、川島真が『近代中国をめぐる国際政治』などで二十一箇条要求を主権問題として分析し

たほか、青山瑠妙はパブリック・ディプロマシーの観点から人民中国期中国の「言説」「交渉」をとらえるなど、各々の担当に沿った成果をあげた。研究会としては、東アジア国際関係史研究会を3度にわたって開催した。第8回研究会(2014年6月10日)は座談会形式で、「日中の歴史認識と教科書問題をめぐって」と題し、歩平(中国社会科学院近代史研究所研究員、前所長)、三谷博(東京大学)に加え、川島真司会のもとおこなった。第9回(10月28日)は張志雲(上海交通大学研究員)「中国海関の多様性と中国近現代史的発展」、第10回(2015年1月20日)は廖敏淑(国立政治大学)「清朝の対外体制」を開催し、本研究課題について本科研メンバーを超えて共有し、議論を展開した。

(2) 第二年度は、初年度に引き続き中国の主権にまつわる「言説」や「交渉」に関する資料の閲覧、収集について代表者の川島真を中心に、国内では東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、外務省外交史料館、国外では、台湾の中央研究院近代研究所、国史館、国家図書館、中国の上海市档案馆、第二歴史檔案館、湖南大学、その他韓国やアメリカなどでおこなった。また、岡本隆司は「清」(『概説中国史』下)などで「領土」概念や主権をめぐる「言説」を包括的に捉えなおし、茂木敏夫は「中華の秩序とその近代——中華世界秩序論の新段階再論」や「文明の名づけ方——中華とその周辺」で近代中国の「交渉」をめぐる議論を深め、青山瑠妙は外交史からのアプローチで現代中国の「言説」「交渉」について検討し、川島は「“二十一箇条要求”と中日関係」などで「主権」問題を詳細に論じるなど、各々の担当に沿って着実に成果をあげている。研究会としては、東アジア国際関係史研究会を5回にわたり精力的に開催した。第11回は劉雨珍(南開大学教授・東京大学客員研究員)「清朝初代駐日公使館員の在日筆談資料およびその学術的価値」(2015年10月6日)、第12回はヴァイゲリン＝シュヴィードルツィク(ウィーン大学元第一副学長)「Whodunnit? Memory and Politics before the 50th Anniversary of the Cultural Revolution」(12月15日)、第13回は楊軍(南風窓総編輯助理)「媒体如何記録常態社会——兼談中国伝媒行業空心化困境」(2016年2月21日)、第14回はメヒティルト・ロイトナー(ベルリン自由大学名誉教授)「第二次世界大戦後の独中関係：その特徴と問題点」(3月3日)、第15回は侯彦伯(中山大學歴史系専職科研特聘副研究員)「十九世紀末新式海關在中國周邊的發展(1882-1895)」(3月25日)として開催し、内外の研究者を招へいし、主に中国の主権にまつわる本研究課題について本科研メンバーを超えて共有し、議論を展開した。最終年度に向けて議論を深めた。

(3) 最終年度は、これまで収集資料の分析を重点的に行い、代表者の川島真を中心に国

内では東洋文庫など、国外は台湾の国立台湾図書館、アメリカのスタンフォード大学フーバー研究所などで補足的に資料を閲覧・収集した。茂木敏夫は「冊封・朝貢」の語られる場において近代中国の「領土」認識の変容や「言説」を再整理し、岡本隆司は『中国の論理』などで「主権」や「領土」をめぐる問題の変遷をたどり、青山瑠妙は「中国の外交、積極展開で影響力拡大」などで現代中国の「言説」「交渉」に関する議論を詳らかにし、川島は“The Turning Points of Modern Sino-Japanese Relations”などで「主権」「交渉」問題を中心に論じ、各担当に沿った成果をあげた。研究会は東アジア国際関係史研究会を7回開催した。第16回は白根晴浩「比較とマルチ・アーカイバルな方法による非公式帝国研究へのアプローチ」(2016年5月11日)、第18回は郭婷玉「日本統治期台湾の信用組合と地方金融の発展」(10月25日)、第19回は林亨芬「主権と管轄の間」(2017年1月7日)として開催した。3回分は書評会で、著者の内容紹介および批評者の報告という形式で開催した。第17回「Hsiaotun Lin, *Accidental State*, Harvard University Press, 2016」は著者林孝庭、批評松田康博(10月11日)、第20回は『『墮落と復興の近代中国仏教』(法蔵館、2016年)』は著者エリック・シッケタンツ、批評松金公正が書評報告(2月2日)を、第21回『『プロパガンダ・ポスターに見る日本の戦争』(勉誠出版社、2016年)をめぐる』は著者田島奈都子、批評川島真(3月6日)であった。第22回は研究代表者・分担者が議論を通じて情報共有・集約をはかった(茂木「普遍と特殊—近現代東アジアにおける秩序構想の語り方」、岡本「藩属から領土へ—中国の「主権」の形成」、川島「主権の危機—対華二十一箇条要求と中国外交(交渉初期の検討)」、青山「変容する主権認識と中国外交」(3月5日)。

(4) 本研究では、以下のことが明らかになった。第一に、20世紀初頭のビルマ国境交渉などで、清朝は歴史的な背景を根拠に主権を主張するスタイルを生み出していた。第二に、それはアメリカ留学の外交官などにより民国期にいっそう理論武装され、中国の存在を維持していく根拠となった。第三に、中華人民共和国期にも平和五原則などでその姿勢は維持されたが、次第に中国が国力の増強とともに実効支配空間を拡大する根拠へと展開していった。これらを踏まえ、中国の周辺諸国、とりわけアジア諸国に対する外交について、理念と政策の両面から、また清代／民国期／現代中国に亘る歴史的変容や連続性を踏まえて解明する共同研究の必要性を確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計47件)

①KAWASHIMA Shin, “The Turning Points of Modern Sino-Japanese Relations”, Arthur

Herman and Lewis Libby eds., *Asian Shadows: the Hidden History of World War Two in the Pacific*, Hudson Institute, 2017, pp.21-30, 査読有。

②KAWASHIMA Shin, ““Deimperialization” in early postwar Japan: adjusting and transforming the institutions of empire”, in Barak Kushner and Sherzod Muminov eds., *The Dismantling of Japan’s Empire in East Asia: Deimperialization, postwar legitimation and imperial afterlife*, Routledge, 2017, pp.30-47, 査読有。

③青山瑠妙「中国と東アジア国際関係—核の安全保障の視点から」『核開発と国際社会—揺れ動く北朝鮮情勢を中心に』広島市立大学広島平和研究所、2017年、25-43頁、査読無。

④茂木敏夫「冊封・朝貢」の語られる場—中華世界秩序の新段階三論』『東アジア近代史』第20号、東アジア近代史学会、2016年、102-121頁、査読有。

⑤岡本隆司「『東アジア』と『ユーラシア』—「近世」「近代」の研究史をめぐる」『歴史評論』第799号、2016年、37-46頁、査読有。

⑥青山瑠妙「中国の外交、積極展開で影響力拡大—「一帯一路」で広域協力圏を構築」嚴善平、湯浅健司、日本経済研究センター(編)『2020年に挑む中国—超大国のゆくえ』文真堂、2016年、151-172頁、査読無。

⑦AOYAMA Rumi, “One Belt, One Road”: China’s New Global Strategy, *The Journal of Contemporary China Studies*, Vol. 5, No. 2, 2016, pp.3-22、査読有。

⑧青山瑠妙「台頭を目指す中国の対外戦略」『国際政治』183号、2016年、116-130頁、査読有。

⑨岡本隆司「清」富谷至・森田憲司編『概説中国史』下、昭和堂、2016年、179-227頁、査読無。

⑩川島真「“二十一条要求”と中日関係」魏格林・朱嘉明主編『一戦と中国—一戦百年会議論文集』東方出版社、2015年、367-388頁、査読有。

⑪川島真「日中戦争初期における重慶発ラジオ放送とその内容」貴志俊彦・川島真・孫安石編著『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、2015年、72-95頁、査読無。

⑫茂木敏夫「文明の名づけ方—中華とその周辺」、獨協大学国際経学部紀要『マテシス・ユニヴェルサリス』第16巻2号、2015年、87-103頁、査読無。

⑬茂木敏夫「中華世界の構造と中国近代思想史の語り方」、京都民科歴史部会『新しい歴史学のために』第286号、2015年、48-61頁、査読無。

⑭茂木敏夫「中華の秩序とその近代—中華世界秩序論の新段階再論」東京大学中国哲学研究会『中国哲学研究』第28号、2015年、106-126頁、査読有。

⑮岡本隆司「モンゴル「独立」問題と漢語概念—キャプタ協定にいたる交渉を中心に」『東洋史研究』73巻4号、2015年、105-139頁、査読有。

⑯ KAWASHIMA Shin, “Sino-Japanese Controversies Over the Textbook Problem and the League of Nations,” in Herren, Madeleine ed., *Networking the International System: Global Histories of International Organizations*, Springer, 2014, pp. 91-106, 査読有。

⑰川島真「問題としての中国」遠藤誠治・遠藤乾責任編集『安全保障とは何か』岩波書店、2014年、147-176頁、査読有。

⑱川島真「二十一箇条要求と日中関係・再考—中国側の対応を中心に」川島真編著『近代中国をめぐる国際政治』中央公論新社、2014年、111~155頁、査読無。

⑲川島真「メディア・歴史認識・国民感情」川島真編著『チャイナ・リスク』岩波書店、2015年、285-307頁、査読無。

⑳青山瑠妙「防衛的、積極的、そして攻撃的パブリック・ディプロマシー—中国における3つの要素」『国際問題』635号、2014年、15-25頁、査読有。

㉑青山瑠妙「中国の外交を分析する—数字で見るアジア諸国との関係」『善隣』444号、2014年、18-23頁、査読無。

㉒ AOYAMA Rumi, *Public Opinion, Nationalism and China's Cooperative Behavior*, Tse-Kang Leng & Yu-Shan Wu ed., *Chinese Models of Development: Global, Local, and Comparative Perspectives*, 2014, pp. 233-254, 査読有。

㉓茂木敏夫「華夷秩序とアジア主義」長谷川雄一編『アジア主義思想と現代』慶應義塾大学出版会、2014年、3-39頁、査読無。

㉔茂木敏夫「近代以降の東アジアにおける地域秩序の変容と中国」『ワセダアジアレビュー』16号、2014年、42-46頁、査読無。

㉕茂木敏夫「中華世界秩序論の新段階」東京女子大学紀要『論集』65巻1号、2014年、46-61頁、査読有。

〔学会発表〕(計43件)

①KAWASHIMA Shin, “The Turning Points of Modern Sino-Japanese Relations” (*Asian Shadows: The Hidden History of World War II in the Pacific*, Hudson Institute, January 18, 2017, ワシントンDC(アメリカ))。

②Rumi Aoyama, *Public Opinion and Foreign Policy in Authoritarian China*, Southern Political Science Association, January 14, 2017, ニューオリンズ(アメリカ)。

③川島真「21世紀の中華—習近平政権と東アジア」立命館西園寺塾、2016年12月3日、立命館大学東京キャンパス(東京都千代田区)。

④茂木敏夫「中国的秩序の理念—その特徴と近現代における問題化」島根県立大学北東

アジア地域研究センター拠点プロジェクト「近代的空間の形成とその影響」第1回国際シンポジウム「北東アジア 胚胎期の諸相」、2016年11月19日、島根県立大学コンベンションホール(島根県浜田市)。

⑤岡本隆司「近代日本が見つめた中国」亜細亜問題研究所現代日本センター招聘セミナー、2016年11月8日、ソウル(韓国)。

⑥川島真「【文史講堂】中国近代外交的の形成と現代中国」復旦大学文史研究院、2016年9月23日、上海(中国)。

⑦川島真「【史学論壇】二十一箇条要求與中國外交」復旦大学歴史学系、2016年9月21日、上海(中国)。

⑧川島真「再考晚清中国与万国公法」第七屆晚清史研究國際學術討論会、2016年9月4日、北京(中国)。

⑨KAWASHIMA Shin, “Images of World Order in Modern China: From the Late Empire to the Nanjing Government” Section: 14. *Politics & International Relations*, Chair: Revelant Andrea, EACS 2016, Aug. 26th, サンクトペテルブルク(ロシア)。

⑩川島真「中国における甲午戦争120年史研究の背景」東アジア近代史学会2016年度第21回東アジア近代史学会研究大会シンポジウム「近年における日清戦争に対する『歴史認識』をめぐって」2016年7月3日、国学院大学(東京都渋谷区)。

⑪川島真「清末中國的世界觀與外交——以《外交報》為主的探討」變動中的東亞：跨域視野的觀察國際學術研討會、2016年5月13日、桃園(台湾)。

⑫川島真「中国に於ける万国公法の受容とその利用——主権概念に注目して」2016年度翰林科学院學術シンポジウム、2016年4月28日、春川(韓国)。

⑬川島真「中国からみたアジア・太平洋の秩序観」日本防衛学会平成27年度(秋季)研究大会・共通論題部会「アジア太平洋地域のパワー(戦略)バランス」、2015年11月28日、防衛大学校(神奈川県横須賀市)。

⑭青山瑠妙「習近平体制下の中国対外関係」日本現代中国学会第65回全国學術大会、2015年10月25日、同志社大学(京都府京都市)。

⑮Okamoto, Takashi, “Tycoon, Sovereignty, and Independence: International Relations Surrounding Modern Korea,” New York Conference on Asian Studies 2015, “Global Asia: Social, Cultural, and Political Spaces, October 16-17, 2015, ニューヨーク(アメリカ)。

⑯ KAWASHIMA Shin, “Internationalism & Nationalism on modern and contemporary Chinese Diplomacy: Tribute system, Revolution and War”, CISH's XXIIInd CONGRESS JINAN, 2015年8月24日、済南(中国)。

⑰川島真「近現代中国の自画像と対外政策の変容—帝国と主権国家との「癒着」地域体

系研究会、2015年7月11日、明治大学（東京都千代田区）。

⑱茂木敏夫「『冊封・朝貢』の語られる場」、東アジア近代史学会 2015 年度大会シンポジウム、2015年6月21日、東京女子大学（東京都杉並区）。

⑲KAWASHIMA Shin, “The Memory and Legacy of the Tribute System in Twentieth-Century China”, Session “The Coastal and the Continental: Qing Frontiers and Foreign Relations in Modern China - Sponsored by Historical Society for Twentieth Century China (HSTCC)”, Association for Asian Studies 2015 Annual Conference, 2015年3月28日、シカゴ（アメリカ）。

⑳川島真「東アジアの過去・現在・未来」基調講演、韓国日本学会、2015年2月7日、ソウル（韓国）。

㉑KAWASHIMA Shin, “‘Deimperialization’ in Early Postwar Japan: The Adjustment and Transformation of Institutions of ‘Empire’”, “Breakdown of the Japanese Empire and the Search for Legitimacy”, 2014年9月20～23日、ケンブリッジ（イギリス）。

㉒KAWASHIMA Shin, “What’s the will of people in Japan?-the Public Opinion and Domestic/Foreign policy-”, Session One: Asia Strategy and Domestic Considerations in Each Country, Moderator: Christopher Johnson, at U.S.-Japan-China Trilateral Dialogue 2014, 2014年9月8～9日、ワシントン DC（アメリカ）。

㉓茂木敏夫「前近代の中華秩序及其近現代の転回—思考「中華」的可能性與侷限」台湾大学人文社会高等研究院主催、東亜視域中的「中国／中華」意識国際学術研討会、2014年7月24日、台北（台湾）。

㉔ KAWASHIMA Shin, “The Japanese Twenty-one Demands and the Relationship between Japan and China”, International Conference: The Impact of World War One on China’s Modern History, 2014年7月5日、ウィーン（オーストリア）。

㉕川島真「対華二十一カ条要求と中国」東アジア近代史学会研究大会「第一次世界大戦と東アジア世界の変容—第一次世界大戦勃発100年にあたって」、2014年6月22日、麗沢大学（千葉県柏市）。

〔図書〕（計 21 件）

①Ryosei Kokubun, Yoshihide Soeya, Akio Takahara, Shin Kawashima, Translated by Keith Krulak, *Japan-China Relations in the Modern Era*, Routledge, 2017, 234 pages.

②川島真『中国のフロンティア—揺れ動く境界から考える』岩波書店、2017年、240頁。

③岡本隆司『中国の誕生—東アジアの近代外交と国家形成』名古屋大学出版会、2017年、562頁。

④岡本隆司『清朝の興亡と中華のゆくえ—朝鮮出兵から日露戦争へ』叢書「東アジアの近現代史」第1巻、講談社、2017年、300頁。

⑤川島真『21世紀の「中華」—習近平中国と東アジア』中央公論新社、2016年、344頁。

⑥岡本隆司『中国の論理—歴史から解き明かす』中公新書 2392、2016年、xvi+232頁。

⑦家近亮子・川島真編著『東アジアの政治社会と国際関係』放送大学教育振興会、2016年、298頁。

⑧劉傑・川島真編著、韋平和・徐麗媛訳『対立と共存の歴史認識—日中関係 150 年』社会科学文献出版社、2015年、495頁。

⑨貴志俊彦・川島真・孫安石編著『増補改訂戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、2015年、599頁。

⑩岡本隆司『日中関係史—「政冷経熱」の千五百年』PHP 新書 1001、2015年、260頁

⑪川島真編著『チャイナ・リスク』岩波書店、2015年、307頁。

⑫和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真『東アジア近現代通史—19世紀から現在まで』上下、岩波書店、2014年、244・256頁。

⑬川島真編著『近代中国をめぐる国際政治』中央公論新社、2014年、274頁。

⑭岡本隆司・箱田恵子・青山治世『出使日記の時代—清末の中国と外交』名古屋大学出版会、2014年、514頁。

⑮岡本隆司編『宗主権の世界史—東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会、2014年、408頁。

⑯崔丕・青山瑠妙『多維視覚下的亞洲冷戦』世界知識出版社、2014年、342頁。

〔その他〕

ホームページ等

川島真研究室

<http://www.kawashimashin.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA, Shin)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：90301861

(2) 研究分担者

茂木 敏夫 (MOTEGI, Toshio)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：10239577

岡本 隆司 (OKAMOTO, Takashi)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：70260742

青山 瑠妙 (AOYAMA, Rumi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：20329022